

南東アラビアのオアシスにおける考古学的景観

—オマーン、ユネスコ世界遺産バート遺跡群およびアル=アイン遺跡における踏査(2024年)—

黒沼 太一 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教
近藤 康久 総合地球環境学研究所教授

Archaeological landscape in the oasis in Southeast Arabia: Archaeological surveys in the UNESCO World Heritage sites of Bat and Al-Ayn, Oman in 2024

KURONUMA, Taichi Assistant Professor, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign studies

KONDO, Yasuhisa Professor, Research Institute for Humanity and Nature

1. はじめに

高温乾燥の砂漠気候に属する南東アラビアにあって、地下水資源に恵まれるオアシスは、紀元前4千年紀後半ごろから現代まで、人びとの生活・埋葬が行われた場所であった。オアシスは南東アラビア内陸砂漠の北縁に走るハジャル山脈の南麓に点在し、中でもバート・オアシスは多くの前期青銅器時代遺構群を擁する(図1)。このバート遺跡群の東方23kmの谷間には同じく前期青銅器時代ハフィート期(紀元前3300-2700年)の墓地であるアル=アイン遺跡が存在し、バート

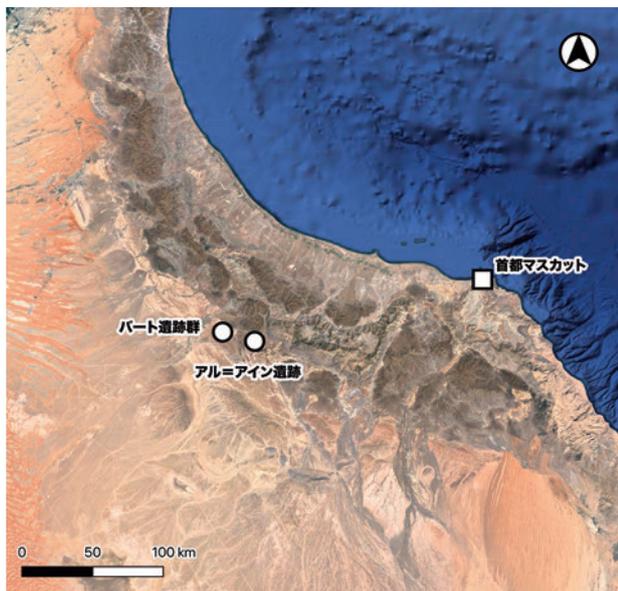


図1 バート遺跡群およびアル=アイン遺跡の位置(Google Satellite イメージをもとに QGIS を用いて作成)

遺跡群とともに内陸部南東アラビアにおける前期青銅器時代の代表的な景観をなしている。

バート遺跡群およびアル=アイン遺跡では1970年代よりデンマーク・イギリス・ドイツ・アメリカ隊などによる調査が断続的に実施されてきた。1988年に「バート、アル=フトゥム、アル=アインの考古遺跡群」としてユネスコ世界遺産一覧表に記載されて以降は、文化財の保全という側面も重要になった一方、各隊の調査成果は独立して公表され続け、世界遺産の範囲内にどのような時期・性格の遺構がどこにどれほど分布しているかを統合的に把握することが見過ごされてきた。この現状は文化財保全の大きな障害となるため、現地担当省庁から近藤康久に世界遺産範囲内およびその周囲の緩衝地帯に分布する遺構群に関するデジタル遺産目録・地理情報システムデータベースの構築を依頼された。この依頼に基づき、近藤を代表とするバート遺跡群デジタル遺産目録(以下、BatDHI)プロジェクトは2013年から2017年まで調査を行い、その調査成果は本報告会で数回報告されている(近藤ほか2017)。現在、これまでの調査成果をもとにした最終報告書を準備中であり、前期青銅器時代だけでなく、旧石器時代からイスラーム期に至る幅広い時間幅で考古学的景観の変容に関する議論を予定している。

2. BatDHI の基本理念と 2024 年踏査の概要

BatDHI は、世界遺産構成遺跡であるバート遺跡群及びアル=アイン遺跡の資産範囲内及びその周辺の緩衝地帯における文化財保全を念頭に置いた、地理情報

システム上の分布図、およびそこに紐づくデジタルベースの遺構目録からなる。対象となる遺構は、上記地理範囲内の全ての種類・時期の遺構であり、対象遺跡に共通する連番制の遺構付番システムを導入し、将来に亘る拡張性を担保している。遺構目録には、出版物や未公開の官公庁提出報告書掲載データ、写真などを収録し、遺構ごとに調査歴や所在地、発見された遺構や遺物などの情報を検索・閲覧できるようにした。さらに BatDHI プロジェクトで独自にフィールド調査を行ってデータを取得し、既知の情報を補完・改訂を念頭に置いた。その上で、獲得・集積した情報をもとに、オアシスにおける考古学的変容に関する議論・成果発信が行えるよう企図した。

2024年2-3月に実施した踏査では、次の目標を立てた。すなわち、(1)BatDHI データベースに欠落している計測データや写真の補足と取得、(2)他隊が報告したものの BatDHI に未収録の遺構の踏査・登録、(3)再利用墓の確認と登録、(4)既登録遺構の記録内容に関する現地での再検討、(5)そのほか新規発見遺構の登録、である。これらの目標を達成するため、パート遺跡群のパート地区およびアル=フトゥム地区、およびアル=アイン遺跡で踏査を実施した。

3. パート遺跡群

パート地区では、既踏査遺構の再訪を中心にしつつ、全範囲を対象に踏査を実施した。前期青銅器時代ウンム・アン=ナル期(紀元前2700-2000年)の墓である DHI 23 では、かつてドイツ隊によって言及された打刻による T 字状の意匠(図2)や、積石用に窪みを設けた礎石を確認・記録した。またパート地区の中心部分から約2.5kmほどの地点では、ウンム・アン=ナル期墓の外壁に用いられる石灰岩未成品の散布地



図2 打刻による T 字状の意匠



図3 墓用石灰岩未成品の散布状況

(図3)を発見した。こちらもドイツ隊によって言及されたものの、2017年までの BatDHI には未掲載だったため記録した。

また、DHI 144 など複数のハフィート期の墓に増設された、中期青銅器時代ワーディー・スーク期(紀元前2000-1300年)や前期鉄器時代(紀元前1300-300年)の墓を発見した(図4)。いずれも元からあったハフィート期墓の構造を一部流用・改変して構築されており、考古学的景観の変容を知り得る資料と言える。これまでの BatDHI では、一部を除き後代に追加された墓は簡単な記載に留めていたが、今回、別途新しい遺構番号を与え、データを取得して目録に登録した。さらに、一部の墓については衛星写真で所在を推定したのみだったため、グラウンドトゥルスを実施した。その結果当初はハフィート期墓としていたものの、実際には鉄器時代の墓の集合であった事例がいくつか判明した。そのため、新規発見分については遺構番号を新たに付与した。

墓に加え、イスラーム期の壁など非埋葬遺構についても再踏査を実施し、一部を新規に登録した(図5)。



図4 中期青銅器時代ワーディー・スーク期再利用墓の一例



図5 イスラーム期壁の一例

パート地区では、壁は治水や農耕地の区画などの用途に用いられており、土地利用の理解のために重要である。

アル=フトゥム地区においても既登録遺構を再踏査して適宜登録内容を改訂し、新たに遺構も記録した。その結果、丘陵上の遺構群について、衛星写真で遺構を推定した地点で実際に崩落したハフィート期墓(図6)を発見したほか、ハフィート期墓や建築址を再利用した鉄器時代墓なども確認した。また、ハフィート期墓としていたが実際には建築址である事例を訂正登録した。

4. アル=アイン遺跡

アル=アイン遺跡は、南東アラビアでも最も良好な遺存状況を持つハフィート期墓群が著名であるが(Böhme 2010)、今回の踏査ではそれ以外の遺構の記録に注力した。その結果、ハフィート期のみならず、ワーディー・スーク期、鉄器時代、イスラーム期の遺構を多数確認できた。

まず、ハフィート期墓群の脇で円形を呈する礎石遺構を2基(DHI 949及び950)確認できた(図7)。大き



図6 アル=フトゥム地区・ハフィート期墓の一例



図7 アル=アイン遺跡・円形遺構

さ、構造などから恐らく石材の再利用のため上部構造を完全に取られたハフィート期の積石塚であった可能性が高い。最初に本遺跡を踏査したベアトリス・デ・カルディが言及した円形の礎石遺構は、本遺構を指していると思われる(de Cardi et al. 1976)。さらに、崩落したハフィート期墓の脇で構築された後代の墓を2基確認した。1 m以下の高さで、平石などを用いて墓室頂部を閉塞するなどの工法上の特徴から鉄器時代と思われる。さらに斜面上には新規造営されたと思われる墓を新たに確認した。同じく鉄器時代と見られる。

これらの遺構が分布する丘上から南東の一段低いテラス部分において、40基以上の小規模な墓からなるクラスター墓群が見つかった。類例から、前期鉄器時代に属すると推定できる。

小規模な谷間を挟んで向かい側にある丘上では、すでに登録しているハフィート墓群を精査した結果、複数の付加壁が見つかった。恐らくイスラーム期に居住目的でハフィート墓を一部流用しつつ構築した建物址であり、少なくとも4基を確認できた。類似した事例は、最も良好な遺存状況を持つハフィート期墓群の北西急斜面上でも新たに確認できた(DHI 955)(図8)。

さらに高位の丘上では、ハフィート期墓や、それを再利用した恐らく鉄器時代の墓、非埋葬遺構の積石なども確認できた。稜線上に位置するため、ある種の目印として機能していたと見られる。

ワーディー・アル=アインの河岸段丘では、ワーディー・スーク期と見られる墓2基(DHI 719・720)とイスラーム期の墓7基(DHI 966-972)を新たに確認した(図9)。さらにイスラーム期の小規模な建築物を1軒(DHI 964)、その脇に段丘縁辺の土留石壁(DHI 965)を記録した。

今回の踏査での新たな発見により、アル=アイン遺



図8 アル＝アイン遺跡・ハフィート期墓に付加された後世の壁



図9 アル＝アイン遺跡・イスラーム期墓の一例

跡においてハフィート期以外にも多岐に亘る時代の考古学的痕跡が明らかになった。この点はアル＝アイン遺跡が前期青銅器時代に限らず、時代を通じて重要性を有していたことを示す。

5. まとめと展望

2024年の再踏査によって、BatDHIに欠落していた

データを補い、他の調査隊によって報告されていながら未収録であった事例を実地で確認・記録したほか、新たに発見した遺構を追加した。これにより、これまで収集した情報を改訂しつつ大幅に内容を充実化することができた。2013-2017年および2024年の踏査を第一期とすると、当初の目標であった最終報告書を作成するため基礎データを整備することができたと言える。

しかし、踏査はバート遺跡群・アル＝アイン遺跡ともに基本的に世界遺産に関連する部分を踏査したに留まっている。より解像度の高い考古学的景観を復元するため、今後はBatDHIプロジェクトの第二期として、未踏査の箇所を調査し、データの収集と目録の拡充を行う予定である。

本調査は、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所基幹研究費により実施した。また調査中は、遺産観光省バート遺跡事務所のモハメド・アル＝カルバーニ氏、スーレマン・アル＝ジャブリ氏、アスマ・アル＝ジャッサシ氏から多大な支援を受けた。記して御礼を申し上げます。

■参考文献

- ・ Böhme, M. 2010 First investigations at the Wādi al- 'Ayn tombs, Oman (poster). *Proceedings of the Seminar for Arabian Studies* 40: 131-134.
- ・ de Cardi, B., S. Collier and D. B. Doe 1976 Excavations and surveys in Oman, 1974-1975. *The Journal of Oman Studies* 2: 101-187.
- ・ 近藤康久・片岡香子・早川裕式・三木健裕・黒沼太一・小口高 2017「先史オアシスの形成過程をさぐる—オマーン、バート遺跡群の環境考古学的調査—」『第24回西アジア発掘調査報告会報告集』88-93頁 日本西アジア考古学会。